

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

やはり俺の住む世界は間違っている

【作者名】

からあげNora

【あらすじ】

力が有り余ってついつい天上を極めてしまったとばかりのチートスペックな肉体を持つ金沢八景はある日、放課後に教員室に呼び出された。そして出会う三人。途中からもう一人加わって彼ら彼女らの物語ははじまる

本作は亀更新です。ご了承くださいと嬉しいです。

駄文です。とにかく駄文です。そちらもご理解をお願いします。

金沢八景はこうして巡り会う

俺が一番印象に残ったのは猛暑が過ぎた直後の金曜日でした。

その日、俺は喉が渴いていたので自動販売機でジュースを買おうとしました。

普段はコンビニを利用して飲み物を買っている俺としては自動販売機でジュースを買うというのは少々緊張しました。

もしかしたら、それが理由かもしれませぬ。

俺はただ購入ボタンを押しただけのつもりでした。

ただ、力の使い方を少し間違えてしまったのがいけませんでした。自動販売機のボタンが陥没しました。

ジュースは指示通りに一本だけ出て来たのは幸いでしたが、下手したら自動販売機を丸ごと壊してしまっていた可能性もあります。

力の入れ方一つで壊れてしまう脆く儂い世界、それがこの俺たちが住まう小さな箱庭同然の世界。

だから俺は小さく脆いこの世界でこう思っんです。

――この世界は俺には適応していないと【

「金沢、この文は何だ？」

「そ、それはですね…、アレですよ！アレ！俺としての感想です！」

「そんな事は知らん。それよりお前はこんな文を教員に見せたらどう思う？」

「……………目に見える世界が変わりますね」

「お前に聴いた私が馬鹿だったよ……………」

あーあー、聴こえますかー？

こちら現場の金沢八景です。

現在私は通っている学校の生活指導担当の教師に捕まっており、職員室からの中継となっておりますー。

その理由としては私が先日「高校一年生を振り返って」というテーマで書かされた文章が気に入らないとのこと。

これが教育界の闇というものですよテレビの前の皆さん、気に入らないという理由だけで盾を得、拳げ句の果てには放課後の唯一自由な時間を奪うという残酷な処罰を……………」

「ほう……………、じゃ私はさながらドラマや漫画に出てくるような腐りきった教師という訳か」

ヤバイ、聴かれた……………のか？

俺の額から冷や汗がどくどくと大量に流れる。

…きつとこれは気のせいだな、うん気のせい……………。

「にしても教師に向かって随分な言い様だな金沢？小声で何か呟いて

いているから耳を澄ましてみたら聴こえてくるのは教育界の闇だの残酷な処罰だの……」

ヤバイ、俺口に出してたのかよ…。

しかも聴かれてはいけないところばかり聴かれてる……！

「もし次にこんな事を呟いたら……分かるな？」

つまりはアレですね、俗に言う社会的抹殺やら精神的抹殺やら、下手したら身体的抹殺………はないと思いたい。

「……了解」

まじ怖い、平塚先生本当に怖い。

何が怖いってその溢れ出すその殺人オーラと平塚先生の美貌から微かに滲み出てしまっている非リア充オーラが声に出ないほど怖い。

多分平塚先生が結婚出来ないのはこれらが原因だなー」

「……ほー、…金沢？私は言ったよな？次は無いと」

「は、はい……」

情けない事に収縮してしまったイン職員室。

…もう最終手段である。

……………平塚先生がとっつっても優しい事に掛けるしかない！

しかし平塚先生は俺の予想を遥かに上回る形でこんな事を言い出して来た。

「…ともかく、罰としてちょっと私について来い」

…ちよつとついてこい？本当にちよつとで終わるの？本当に？本当の本当に？これでそれが本当なら俺は手放して喜ぶけど良いの？

……………まあ、今思えば当然ちよつとでは済まなかったのだが。

移動3分、戸惑い10秒、俺の儂い恋心はプライスレス。まあそれは良い。

そんなこんなで終着した場所は皆さんご存知、リア充だけでは無くホモやレズにもご用達の目立たなくい上に何時も鍵が空いている空き教室だ。

「平塚先生、貴女まさか……………」

「今お前が考えている様なことは一切ないから安心していいぞ金沢」

「…なぜに俺の心が読まれる……………」

解せぬ。

そんな茶番をしていると平塚先生が俺に手招きして来た。

「ほれ、入るぞ」

「入るんだ……………」

さつきあんな事を言っってはみたが、実のところ全くこの教室についての知識は一個もない。

もしかしたら謎の組織の地下アジトかもしれないし、はたまた此の世から一次元ズレた世界に行く中二病同好会かもしれない。

個人的には一番のオススメはゲーム制作部だ。ゲーム楽しいしね。因みに(仮)が付いても俺的にはセーフ。(没)が付いたらアウトだ。なぜならそれは部活じゃないから。

「…早く入れ金沢」

気が付くと平塚先生は既に扉を開けて教室内に入っていた。

仕方ないので俺も教室に入り室内の様子を観察する。

そこには俺の期待していた様な魔法陣やら妙な模様やらは無く、かと言つて棚に沢山の漫画にボードゲーム、そして真ん中に長方形に大きい机があつてその上に菓子が大盛りで乗っている訳でもなく、ただ淡々と寂しく真ん中にイスがあるだけだ。

そしてそこには一人の女子生徒が座っている。勿論誰かは解らない。クラスメイトさえ覚えれない俺の記憶能力舐めんな。その気になれば過去に出会つて来た人物に関する記憶も全消去できる。俺にとつては便利な力だ。多分。

「…平塚先生？入る時はノックをお願いしたはずですが？」

「君はノックをしても返事をした試しがないじゃないか」

改めてイスに座っている女子生徒を観察する。

……まあ一言で言うなら美少女で終わるんだけどな。補足を付けるなら氷の様に冷たい表情とそのピンと伸びた背筋が少し気になる。

「……氷の女王？」

「その人。何か言ったかしら？」

「いえ断じて何も、微塵もこれっぽっちも言ってません」

人には少なからず一つくらいは琴線に触れてしまう言葉がある。

多分今回のその単語もそうなのだろう。きっと。

…気になったのでそつと氷の女王の表情を盗み見る。そしてさつと顔を伏せる。

はい、分かりやすいほど怒りのマークが着いていましたよありがとうございます。

これで確実に俺が彼女の琴線に触れたのは分かってしまった。では初対面の俺が彼女にしてやれることは何か？

……… 答え、そつと置いていおく。別名放置作戦だ。

…決して自分の保身とか今ここで俺が何か言ったら後が怖いとかじゃないよ？

「…それで、そのこの礼儀作法がなってない人は？」

ヤバイ、自分から攻撃に出てきた。しかもむっちゃ怖い。下手なホラーより迫力が数十倍あって危ない。

「彼は入部希望者だ」

「…はい？」

色々と思うところはある。

ここは部活だったのか、とかこの部屋何もないじゃん、とか。

「…そうですね………」

だが一番の疑問、というか恐怖は彼女だ。同じ部活としての仲間どころか最早何もしていないのに危険人物を見る様な目をしてるぞ。しかも威圧感も感じるし。

しかし、超渋々とは言え納得しているのは意外だ。

もっとこう、「そのこの男の下卑た視線を見ていると身の危険を感じるのでお断りします」とか言われる気がしたのに。本当に意外だ。

「じゃあ雪ノ下、私はまだ予定があるから少しの間頼むぞー」

おいコラ待て教師。連れて来といて自己紹介も無く放置した上にそのまま放棄か？何だよこの空気、お兄さん苦しくて泣いちゃうよ？

しかし無慈悲にも平塚先生は教室の扉をボタンと開けてそのまま出て行ってしまった。せめて扉を閉めろよ。

どうしようかと戸惑っていると先に氷の女王…いや、怒られるから

氷の人に名称を変えよう。

その氷の人が俺に話しかけて来た

「まずはその扉閉めてはくれないかしら？少し肌寒いだけけど」

氷タイプの人でも寒いとか感じるんだな。てか初対面で命令とか肝座ってるなー、俺だったら絶対どもりながら言っわ。

「あ、ああ」

そう思いつつ俺は丁寧にドアを閉める。もし音を立てて閉めてしまったせいで目の前の氷の人が腹を立ててしまったら殺される自信があるからだ。10ポンド掛けてもいい。

「で、まず貴方の名前は何かしら？…正直聞きたいのだけれど、同じ部活になってしまつ以上はお互いを呼ぶ場面が発生してしまうから、一応聴いとくわ」

おう、当然の如く開幕毒舌スタート。しかも好ダツシュ、しっかり俺の心のピンポイントに言葉が突き刺さった。

やっばい、超痛い。効果抜群で2倍ダメージが俺の心に刻めこまれる。

「…金沢八景。何とでも呼んでくれ」

一応聞かれた以上はしっかりと答える。もしここで無視したせいで更なる冷たい空気がこの空間を覆い尽くすのは勘弁被る。

「そう、じゃあ話を進めるわ」

ちょっと待てオイ、俺はお前の名前を聞いてない上に知らないんだ

が。

「その前にお前の名前、何だよ？俺はお前に会ったことも見たこともないから知らんけど」

別に名乗らなくてもいいぞ、まあ名乗らなかつたら氷の人って呼ぶけどな、という言葉は心の中に盛大に締め込む。面と面で向かって言ったら死ぬ気がする。社会的に。

「貴方私の名前知らないの？」

「いやだから知らんて」

むしろなぜ知っていると思った。

普通学校の同級生ってだけならクラスメイトの名前覚えれば良いだろ。わざわざ関わる機会のほぼ無い他クラスの人の名前覚えても意味ないし。

「これでも結構学校では有名なだけけど……、まあいいわ。私の名前は雪ノ下雪乃よ。言っておくけど、次はないから」

だからいちいち怖いって。なんで威圧するんだよ。

「で、話を進めるのだけど、貴方は何の欠陥があるのか答えてもらえるかしら？」

「いや、むしろさうだよ。」

「だって貴方、この部活来たって事は何かしらの問題を抱えているんでしょ？」

………問題？

「お前、寧ろ逆に言うのが世界中に問題を抱えていない人間が存在しているのか？人間には三大欲求 + があるんだぜ？」

食欲性欲睡眠欲に加えて金欲、これだけ欲を抱えていれば人間誰しも何かしら間違っているはずだ。

だから間違っていない人間など存在しない。居るとしたらそいつは人間じゃなく感情の無いクローン人間だ。

「そう言われるとそうね、…じゃあ言い方を変えるわ。貴方にはその中でも一等目立って間違っている人間だわ」

「ああ、その言い方で良い」

………って良くねえだろ俺。どちにせよ俺が何か問題行動起こした後の不良みたいな感じの扱いになっちゃってるじゃん。

………チエンジだチエンジ！

………もう俺帰りたい。

そんな俺の儂い願いが女神にでも届いたのか、俺が来た時ぶりに教室と廊下を繋ぐドアが開く音がした。

視線を雪ノ下から移すとそこには平塚先生の堂々たる立ち姿が出現していた。

………助かったー………。

………と、俺は平塚先生を見てみると後ろに誰がいるのに気付いた。ただ、こいつ、見覚えがある。

確か去年から一緒のクラスだった奴だ。目が程よく腐っていたからとても印象に残っている。

見た目的にはまあそれなりにイケてる方向ではあるんだがなー…。

ただ性格が捻じ曲がっていた記憶がある。あまり覚えてないが。

…確か、…比企谷八幡…とかいう名前だったはずだ。

こうして俺達は星々の集まる星座が現れるように、数奇な巡り会わせを果たした。

俺はただ、何と無く、高校二年生になっての日々が遂に始まると思っただ。

こうして三人は取り残される

「平塚先生、先程も部屋に入る時はノックをお願いしたはずですが」

「だから君はノックをしても返事をした試しがないじゃないか」

何このやり取り、超デジャブなんだけど。

てかこの掛け合いはまさか毎回やってるのか？この2人だけにしか分からない唯一無二の挨拶みたいなの…？

……何かカップルみたいとか想像してしまった。悪霊退散、邪な事を考えたらまた怒鳴られる。

「それでそのぬぼー、とした人は？」

多分これは比企谷君の事を指しているのだろう。ただ、ぬぼー、という表現にはちょっと無理があると思うけど。

むしろ彼はヒョロヒョロとかキョロキョロとかそんな感じだろ。

今のこいつのオーラを見ると。

もうこいつのあだ名、二つ合わせてヒョロキョロにするか？

「彼は入部希望者だ」

「2年F組、比企谷八幡です…」

どうやら比企谷君も俺と似たような感じで平塚先生に容疑者の如く連行されて来たらしい。少し親近感が湧く気がしなくもない。個

人的にはあともう少し目が澄んでたら親近感が沸いてたと思う。

その比企谷君はというと、平塚先生に小声で話しかけている。多分、「おいどういことだ?」みたいな感じで問いただしているのだろう。無駄だと思うけど。

平塚先生に聴いても無駄無駄無駄ーッ!

そうして比企谷の事を観察していると、平塚先生はわざと大声にして比企谷に話し始めた。

「君には舐め腐ったレポートを提出した罰としてここでの部活動を命じる。…安心しろ、お前と同じ様な境遇の奴がもう一人いる、そいつと切磋琢磨し合って更正すると良い。これに関しては異論反論抗議質問口答えは一切認めない」

おお、なんか迫力あるぞ。

にしても最後の言葉、理不尽過ぎだろ。質問まで認めないとか絶対越権乱用だろ。

……まあその常識に縛られない感じが平塚先生クオリティだよな、うん。

…そして絶対切磋琢磨し合って更正するとかいう話題には俺は触れないぞ、絶対。

そんな事を決心していると、はっきり目に分かる程に比企谷君の目が腐っていった。まるでゾンビのようだ。

気のせいかオーラまで腐の匂いがする。超近づきたくない。

「見れば分かる通りこの彼は芯まで腐り切っているせいでいつも孤独

の立場にある哀れむべき存在だ。そこでこの部活で彼を更生して欲しいというのが私の依頼だ」

へえ、そうなんだ。

……………つてそうじゃねえ！

「じゃあ俺はなぜ今この場に居るんですか？別に俺はそこに居る比企谷君のように腐って居るわけでもない上に人付き合いも人並みには出来てますよ？」

本当に何故俺はここに居るんだ。

別に俺は問題児でも成績不審者でもないっていつのに……………。

早く帰りたい。

そんな俺の本心を読み取ってくれたのか、平塚先生はゆっくり丁寧に大声で俺の疑問に答えてくれた。

「先程も言っただろう？異論、反論、抗議、質問、口答えは一切認めない、と。」

……………さて、何か言ったか金沢？」

「いいいいえ…。俺は別に何も言ってますん、ちょっと口から息吸ったら声が漏れちゃっただけです…。」

次は無いと言っている気がした。

……………てか度々思うけど何で平塚先生はそんな威圧感出せるの？霸王

なの？ 覇気だせるのねえ？

そんな俺が下らないことを考えている間にも会話は進展を見せていた。

「先程の依頼の件ですが、お断りします。その男の下心に満ちた下卑た視線を見ていると身の危険を感じます。もう一人の方も意味不明なので嫌です」

待て、俺はどっちだ？

…まあ俺的には意味不明の方が良いかな？ 意味不明って要するにミステリーだろ？ それに英語にしたらアンノウンとも言えるじゃん。ほらかっこいいかっこいい。

そうしていると、氷の人…改めて雪ノ下は俺たちを交互に見つつ小さく溜息をつく。…危ない、また氷の人って言うところだった。多分次バレたら今度こそ（社会的に）抹殺される……！

そんな戦慄を覚えてきると、平塚先生が口を開いた。

「安心したまえ。その彼のリスクリターンの計算と自己保身は中々のものだ。そっちは少し行き過ぎるところもあるが…、まあ悪い奴ではない。割り切ってくれ」

待ってくれ、これってフォローになってないよね…？

むしろ俺の繊細かつ崩れやすいハートを完全に撃ち抜かれた音があるんだけど。

もう一人の入部希望者である比企谷君の方を見ると、向こうも同じ

様で、更に目が腐っているのが目に見えて分かる。それ以上腐ったらもうゾンビを超えてミュータントとかになれるんじゃないか？

「平塚の先生の依頼ですから無下にも出来ませんし、分かりました。その依頼引き受けます」

えっ？良いのか？

むしろ雪ノ下なら、「断固として断らせて頂きます」とか言ってしまうのに、意外だ。

もしかしたら平塚先生には何かしらのプラスの感情があるのかもな。

…ところで今まで疑問にしていなかったんだけど、この部活ってまさか毎日ある……とかじゃないよね？

どう見てもこの部室的には文化系だ。ガッチガチの文化系だ。

…まあこれは、日々強靱なボディービルダーを目標に体に鞭打って鍛えてます、とか雪ノ下が言ってこない限りの話だが。

まあ99%はここは文化系の部で正解だろう。因みに残り1%は、ボディービルダー部。ちょっとそんな部見てみたいという理由で1%に入れてみた。別に入りたいわけではない。

まあともかくだ、文化系で毎日部活あるのなんて演劇部ぐらいだ。だからこの部はそんなに厳しい部活じゃないはず……。

まあそう信じつつも後でこの部のことについて聞こうとした俺偉

い、ノーベル賞取れる。無理か。

「じゃあ雪ノ下、後は頼むぞー」

気づけば平塚先生はいつの間にか教室のドアを開けて、廊下に向かって行くところだった。流星、行動がキリキリしてて早いだけのことはある。

…ただ、俺には問題の全てを雪ノ下に丸投げして逃げた様にしか見えなかった。事実は違ふと思うが。いや思いたい。

…まあ別にそれは良い、ただこれだけは言わせて欲しい。

「…平塚先生……ドアを閉めてから行ってください……」

そうして静寂な空間に3人、ポツンとドアが開きっぱなしの教室に残された。